宗教間対話会議・基調講演

平和と共生――イスラームと仏教の対話

ジョセフ・クルップ首相府大臣

ご来賓、ご列席の皆様、サラーム・サトゥ・マレーシア、[1]こんにちは。本日、皆様とともに時間を過ごせますことを、私は大変に喜ばしく、また光栄なことと思っております。

このような貴重なイベントを、主催団体のマレーシア創価学会（ＳＧＭ）、東洋哲学研究所（ＩＯＰ）、マラヤ大学文明間対話センター（ＵＭＣＣＤ）が、マレーシア首相府国家統一・統合局（ＪＰＮＩＮ）の協力のもとに開催されましたことに対し、心よりお祝い申し上げます。今回、法華経展（「法華経――平和と共生のメッセージ」展）の関連行事として、「平和と共生」というテーマでイスラームと仏教の素晴らしい対話・交流を、こうして拝見できることは、私の誇りであります。

マレーシア航空３７０便[2]

講演に入ります前に、マレーシア航空（ＭＨ）３７０便について触れさせていただきます。同機から「了解、おやすみ（Alright, goodnight）」という最後の言葉が

講演するジョセフ・クルップ大臣

発信されてから、1カ月以上がたちました。航空機の失踪に私たちは大変なショックを受けましたが、一方で、これまでさまざまな理由から分裂していたマレーシア国家が、同じ祈りを共有して団結する国家へと変わりつつあります。先月、オーストラリアの新聞は、次のように報じました（3月19日付）。「2800万の人口を抱え、宗教の相違と敵対心がしばしば露わに示される国（マレーシア）で、宗教を超えたこうしたセレモニーが行われようとは、11日前には誰も考えなかっただろう。マレーシア人にとって、ヒルマン・ノーディン尊師（イスラームのイマーム）が祭壇から祈りを捧げた際に、非ムスリムの人々が敬虔に頭を垂れた、あのような光景は、団結への驚くべき前進であった」

ムスリム、キリスト教徒、ヒンドゥー教徒、そして仏教徒が、宗教や国籍、肌の色の違いを超えて、MH370便のすべての乗客、とりわけふたりの赤ちゃんが無事に帰還することを願い、肩を並べて共に祈りを捧げる光景は、ただただ美しいものでした。宗教を超えた、こうした多宗教の祈りの姿には、一つの国家と

して私たちが共に目指すべきある種の一体感が表れ出ています。ちなみに、先月、同機についての緊急動議が議会に提出され、私は演説の中で、ＭＨ３７０便を偲んで、３月８日を「国民の祈りの日」に制定することを提案しました。

３７０便を忘れないということ、それが何を意味するかと申しますと、Ｒ＆Ｂ（リズム・アンド・ブルース）アーティストで歌手のレシュモヌ（Reshmonu）が「#UniteForMH370」（マレーシア航空３７０便のための団結）というプロジェクトを立ち上げた際の言葉の通りだと思います。レシュモヌは言いました。このプロジェクトは「われわれが一つの家族、一つの仲間として団結するための基本たる特性を身にまとうことだろう。……あらゆる職業、宗教、民族の人々を共に集わせ、互いを隔てるために作ってきた、いつもは目につく境界線を乗り越えて、価値ある目標のために協力させるだろう。今宵かぎりは、隔たりを忘れて、共々に立とう……信仰、思いやり、そして愛のために」と。私は彼の言葉に賛同いたします。

３月８日を「国民の祈りの日」に制定するための内閣の公文書は、政府の検討事項とするべく、まもなく提出される予定です。

神への信仰

ご来賓、ご列席の皆様。今日、宗教の違いは、われわれの間を引き裂く最も深刻な要因であると思われています。スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、１８９３年９月11日、アメリカのシカゴで開かれた世界宗教会議での彼の最初の講演において、次のように述べました。「宗派主義、頑迷、およびそれの恐ろしい子孫である狂信が、この美しい地上を長い間占領してきました。それらはこの世界を暴力で満たし、幾たびも人間の血でずぶぬれにし、文明を破壊してすべての民族を絶望におとしいれました。もしこのような恐ろしい悪魔どもがいなかったなら、人間社会は今あるよりはるかにもっと進歩していたことでしょう」[3]

また、２０１１年、（マレーシアの）ナジブ・ラザク首相は、オックスフォード・イスラーム研究センター

で次のように語っています。「私たちの選択は明確です。手を取り合い、子供のために正義、自由、希望、思いやり、善意に満ちた未来を作る運動に参加しましょう。私たちが行動に移さなければ、不公平、圧政、絶望、残虐、恨みに満ちた未来が待ち受けているでしょう[4]」

ここで明確なのは、宗教自体に問題があるのではないということです。私たちが立ち向かわねばならない相手は、不寛容さであり、宗教的な頑迷、そして偏見なのです。つまり、私たちは精神的な傲慢に歯止めをかける必要があるのです。

兄弟姉妹の皆様。ルクネガラ（Rukun Negara／マレーシアの国是）は、神への信仰という原則を最高位に位置づけています[5]。すなわち、宗教こそが、国家の安穏と国民の団結の要であるとしているわけです。したがって、互いの宗教を理解することがわれわれにとって不可欠なのです。自分の宗教を他者に説明し、他者の宗教について問うための時間をつくらなければなりません。持続可能な社会を建設するためには、宗教間対話にこそ最大の焦点を当てるべきなのです。その意味で、本日、皆様の団体が行っているような対話は、平和で持続可能な社会を創るための、私たちの希望です。なぜかと言えば、すべての宗教の核心には、「穏健性がもつ神聖さ」への信念があるからです。寛容や敬意といった穏健性の価値は、すべての宗教の信仰と信念に備わっているものなのです。

すべての偉大な世界宗教は、「人間の尊厳に敬意を払う」ことについて、また「何が正しく、何が間違っているのか」「何が公正で正義なのか」ということに関して、共通の見方をもっています。穏健性、寛容、敬意は、マレーシア人の間で実践されてきた価値であり、私たちが団結し続けるための不可欠の要素であり、互いに仲良くやっていくために必要な価値なのです。人間はその性質からして、民族的・宗教的な偏見を完全に消し去ることはできません。しかし、私たちができることがあります。しなければならないことがあるのです。すなわち、もしも、すべての宗教の信徒が協力するならば、さまざまな国家や社会の中で人々

が直面している不寛容さや偏狭な考えは抑制できるはずなのです。私は固く信じているのですが、我が国のように、多様な民族、多様な宗教、多様な文化と言語をもつ社会にあっては、不寛容や宗教的偏狭を抑制するメカニズムは、本日のこの「イスラームと仏教の対話」のごとき崇高な努力を通してこそ働くのです。

対話の重要性

お集まりの皆様。ある学者はこう述べました。「人が、自分の宗教を他者の視点から見るためには、宗教間の対話は絶対的に必要なものである。宗教間対話は、自らの信仰が健全かどうかを診断させるものであり、平和と正義のための協力を実行しやすくしてくれるのである[6]」

また、宗教間対話の大いなる提唱者であるダライ・ラマ14世は「人々は、仏教徒に改宗するよりも、それぞれ自分の宗教の中の最も素晴らしいものを見つけるほうがよいでしょう」とまで語っています。われわれは誰もが、今回の対話が非常に崇高な意図をもっており、現代において緊急に必要なことの一つであることに賛同できます。私たちの多宗教・多文化社会で、こうした対話が行われることは、実に時にかなったことであります。

このような対話を行うには、マレーシアは最もふさわしい場所です。なぜでしょう？　私は、自身の信念としてこう思っています。「われわれは、マレーシア人として、長きにわたって伝えられてきた多様な伝統や文化から、豊かな実りを刈り取らねばならない。なぜなら、それらは人類共通の智慧の結晶なのだから」と。私どもは、世界の他の多くの地域と比べれば、かなりうまく共生してきたように思います。肝要なことは、今回の対話が、あらゆる宗教の信徒たちの間に、相互の理解と尊敬を生み出せるよう、そのことをこそ目的として行われることです。

理解と寛容を生み出す非凡な方法――対話

私の兄弟姉妹の皆様。私たちは、このような貴重な対話を、決して説教や宣伝や布教のために利用しては

なりません。自己主張のためだけに行ったり、自分たちだけの狭い利益や、狂信的な考え、イデオロギーを押しつけるために対話を行ってはならないのです。

ここで、教皇フランシスコの言葉を引きたいと思います。

「……宗教間対話と福音伝道は、互いに相容れないものではなく、むしろ互いを育て養うものである理由がここにあります。ですから私たちは、何も押しつけませんし、信徒を引き寄せようと戦略を使ったりはしません。そうではなく、私たちはただ、私たちが何を信じ、どんな人間であるのかを、喜びをもって、素朴に証言するのです」「異なる宗教伝統をもった者同士の建設的な対話は、もうひとつの不安（宗教そのものに対する社会の不安）を乗り越えるための手助けになります。あまりにも世俗化されてしまった社会の中で、残念なことに、そうした不安というものが、ますます増大していることを私たちは知っています[7]」

こうした対話は、理解と寛容を生み出す非凡な方法に成り得るでしょう。もしも、その対話が複雑な神学的問題よりも道義、倫理、価値といったものに焦点を当てるならば――。対話は互いに尊敬の念をもって、率直かつ誠実になされるべきです。そうした話し合いは「開かれた語らい」の機会であり、それによって互いの絆が強まるだけでなく、自分たちのコミュニティをより良くするために私たち自身を変革してくれるのです。こうした対話は常に、私たちのコミュニティがより大きな利益を得るための共通の利益に関するものでなければなりません。より大きな共通の利益とは、個々人の利益よりも集団的なニーズに関するものです。つまり対話は、他者や他の集団を犠牲にして、自分や自分の集団のためだけに偏った利益を得るようなものであってはなりません。

今日の対話は小さな一歩にしか見えないかもしれません。しかし、「どんな作用にも必ず反作用がある」と物理（宇宙）の法則が保証しているように、この小さな一歩は、いつか必ず実を結ぶことでありましょう。

地域社会の草の根に届く宗教間対話

ご来賓、ご列席の皆様。２０１３年の後半から、このような組織だった対話が、地方レベル、国家レベルで急増していることを、私は喜ばしく思っています。ただ残念なことに、こうした対話に参加する構成員はいつも同じであるように見えるのです。私は思います。異教徒間の相互理解を促進するという肝心の目的を達成するためには、このような対話を大衆にも届く身近なものにする方法を見つけなければならないと。異教徒同士のより深い理解と協力は、宗教間対話を地域社会の草の根レベルに届くものにできた時、はじめて現実になるからです。今こそ、私たちが人びとに宗教間対話のやり方を教えていくべき時ではないでしょうか。それによって、こうした対話が人々に届くものになるのはもとより、各宗教のもつ普遍的価値が、より広い範囲で共有されることになるのです。

終わりに

最後に、ここにいらっしゃる皆様が、このような有意義な週末を過ごされることを、祝福申し上げます。今日という日が、楽しく、そして啓発的な一日となりますように。

17世紀に信教の自由を高唱したロジャー・ウィリアムズ(8)は、こういう趣旨のことを言いました。それをご紹介して、私の話を結びたいと思います。

「あなたが長い間、船のハッチのそばで働いた後で、舵を握る立場になったならば、ハッチ周辺の労働現場がどんなものだったかを決して忘れてはならない」

「結局のところ、今日われわれが他人のために護った権利は、明日われわれ自身が必要な権利となるかもしれないのだ」

建設的な良き討議となりますよう、お祈り申し上げます。ありがとうございました。

訳注

（1）サラーム（Salam）は、ムスリムのあいさつの言葉。「サトゥ・マレーシア（1 Malaysia）」（Satu Malaysia / One Malaysia）は「一つのマレーシア」という国のスローガン。２０１０年、ナジブ・ラザク首相が提唱した。民族・文化の多様性を尊重しながら、一つの国家として発展しようと訴えている。

（2）マレーシア航空３７０便は、２０１４年３月８日午前０時41分（現地時間）、２２７人の乗客と12人の乗組員を乗せて、北京に向けクアラルンプール国際空港を出発したが、原因不明のまま行方不明になった。

（3）スワミ・ヴィヴェーカーナンダ『シカゴ講演集』、日本ヴェーダーンタ協会訳、同協会刊、１９９５

（4）２０１１年５月16日、Oxford Centre for Islamic Studiesで行われた同首相の講演“The Coalition of Moderates and Inter-Civilizational Understanding”（穏健派の同盟と文明間理解）から。邦訳は「穏健派によるグローバルな運動（The Global Movement of Moderates = GMM）」による以下のサイトから。http://www.gmomf.org/wp-content/uploads/media/1224.pdf

（5）１９６９年５月、クアラルンプールで中国系住民とマレー系住民の衝突事件が起こり、多数の死傷者が出た。この事件を契機に、国家の統一を図るべく、翌年、①神への信仰②国王と国家への忠誠③憲法の遵守④法による統治⑤良識ある行動と徳性の５つを定めた「ルクネガラ」が国王の名において発表され、国民に教育されてきた。

（6）ノルウェーの牧師で神学者のトロント・バッケビグ（Trond Bakkevig）博士の言葉。

（7）２０１３年11月28日の教皇の説教。宗教間対話のための高位聖職者会議の総会で。

（8）Roger Williams（１６０３〜１６８３）。イギリスに生まれ、アメリカで活躍した牧師・神学者。政教分離と信教の自由を強く主張し、各人の自覚的信仰告白を尊重する「バプテスト教会」をアメリカで設立した。

（Y.B.Tan Sri Datuk Seri Panglima Joseph Kurup／マレーシア首相府大臣）